

ディケンズにおける自殺の諸相

Aspects of Suicide in the Works of Dickens

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



1 犯罪としての自殺

「自殺者」の法律用語は ‘felo-de-se’ であり、これはラテン語で「自分に悪を働く者 (evildoer upon himself)」を意味する。ヴィクトリア朝の人々は自殺を不道徳で不面目な悪と考えていたが、それがキリスト教の影響であることは言うまでもない。「神は人を自身の形に創造された」(Gen. 1: 27) と語られる聖書の観点から言えば、自殺は神を殺すことに他ならず、許しがたい大罪である。従って、イギリスの民法では 10 世紀から、自殺者は心臓に杭を打ちつけて十字路の脇に葬られ、財産はすべて国王に没収されてきた。そのためか、身内に自殺者が出ると、家族はそのことを隠して、キリスト教の儀式をせず夜こっそりと埋葬していた。『メリー・クリスマス』などと触れまわる大馬鹿野郎は、どいつもこい

つもプディングと一緒に茹であげ、心臓ひいらぎに柁の杭を突き刺して埋めてやる」(Carol, 1) というスクルージの発言は、そうした伝統的な民法に準拠したものである。そして、この不名誉で苛酷な埋葬は 1823 年に廃止されるまで続けられ、財産没収の方は 1870 年まで法律で認められていた。

このような蛮刑はクウィルプのように残忍で狡智にたけた悪の権化にこそ似つかわしい。テムズ河の岸に打ち上げられたクウィルプの死体に関しては、世間の人々が自殺だと噂したために、検死陪審の評決でも自殺となり、「心臓に杭を突き刺して、寂しい四つ辻の中央に埋められることになった」(OCS, 73)。そのせいか、フィズが描いた挿絵は河岸の杭がクウィルプの心臓に突き刺さっているように見える。結局、この蛮刑は適用が中止され、死体は密かに雇い人トム・スコットに引



き渡されることになるが、彼によって真夜中に墓から掘り出され、「未亡人が指示した場所」へ運ばれたという噂が流れる。では、クウィルプ夫人が指示した場所とはどこか。具体的には書かれていないが、ここでギャンプ夫人がガイ病院で死んだ夫の遺骸を「医学のために処分した」(MC, 19), つまり解剖医に売り飛ばしたという噂を連想するのは、決して筆者だけではあるまい。

キリスト教では自殺が宗教的な罪と見なされるので、そのことが自殺の抑止力になっている。ところが、イエスの死は自発的に生命を差し出した自殺だという意見もある。確かに「キリストは私たちのために自分の命を捨てられた」(1 John 3: 16)と記されているが、ここで命じられているのはキリスト者が自己犠牲的な愛をもって兄弟を愛することであり、その意味で自殺と自己犠牲とは峻別しなければならぬ。現実逃避のための自殺は自分を

楽にするための利己的な行為であるのに対し、イエスが人類の罪を背負って十字架で死を受け入れた自己犠牲は利他的な行為、すなわち愛の謂に他ならない。シドニー・カートンの死もまた、ルーシーへの愛を証明するための単なる利己的な自殺ではなく、自己犠牲的なキリストの愛の意味合いが強い。その証拠に、ルー

シーのみならず馬車に乗せられてギロチンに運ばれるお針子にとっても、カートンは「神様がご遺わしくくださった方」(TTC, 3: 15)となっている。

2 入水自殺と投身自殺

市参事会員キュートは、不愉快なことを自分の前で決して口にさせない『リトル・ドリット』のジェネラル夫人のように、自分に都合の悪いことには必ず禁止 (Put Down) のお触れを出す。特に子供を連れた病気の女による自殺は論外である。「もし自暴自棄になって、恩知らずにも、不敬なこと、欺瞞を働き、身投げか首吊り自殺を凶っても、わしは少しも気の毒とは思わんぞ」(Chimes, 1) と言って自殺を禁止する。彼は、貧しい娘が結婚などしようものなら、すぐに子供(なぜか男の子供)ができ、夫が早死にしていまい、子供を抱えたまま浮浪者となり、病気になって働けず、最後は自殺する

に決まっていると主張するが、この愚説は彼にとっては広く認められた正しい説に他ならない。これは、とある新興宗教団体の主宰者が連呼する定説のように荒唐無稽に聞こえるが、実際には似たような定説（というか、俗説）がヴィクトリア朝の人々の間で共有されていた。

例えば、墮ちた女の人生行路に関しては、田舎から都会に出た無産階級の美しい娘が有産階級の紳士に誘惑され、身ごもって捨てられ、不義の子を抱えて自立できずに街の女となり、やがて性病で街に立つことができなくなって貧困と後悔に苛まれ、最後は絶望の果てに川へ入水自殺が投身自殺をするという、当時の人々が思い描いていた図式がある。このような人生行路は、清らかな田舎から汚れた都会へ流れ込み、最後は死の海へ到達する川のイメージによって暗示されることが多い。デイヴィッドとペゴティー氏がマーサ・エンデルの入水自殺を阻止する際の「川は、私の人生みたいに、いつも荒れ狂う大海へ流れ込む—だから、私も川と一緒に行かなくちゃいけないの」(DC, 47) という彼女の悲痛な叫びには、この図式が端的に現れている。

ジョージ・F・ワッツはトマス・フッドの詩「溜息の橋」(1844)に着想を得て、『入水自殺』(Found Dead, 1848-50)でウォータルー橋のアーチの下に打ち上げられた女性の死体を描いたが、この橋は自殺の名所として夙に有名であった。1817年6月18日のオープン以来、この橋のアーチは宿な

したちが風雨をしのぐ住処—経験者サム・ウェラーの言葉を借りれば、2ペニーの木賃宿に泊まる余裕もない人々にとって「家具のない宿」(PP, 16)—となった。この橋については、夜の散策をする無商旅人が半ペンスの渡し料を払って通るとき、「テムズの河面に映った灯火は深い川底から発しているように見えたが、それはまるで亡霊たちが自殺者たちの落ちて行った先を示すために掲げているかのようであった」(UT, 13)とディケンズは記している。

墮ちた女が川で自殺する場合、上記の入水自殺とは別に、クルークシャンクの「哀れな娘の自殺」('The Poor Girl Homeless, Friendless, Deserted, Destitute, and Gin-Mad Commits Self-Murder,' *The Drunkard's Children*, 1848)に見られるように、橋の上からの投身自殺がある。無商旅人がロンドン・ドック近くのウォピング女子救貧院に行く途中で渡るオールド・レーン橋もまた、「嘆きの橋」という別名を持つ自殺の名所であった。この橋に幽霊のように立っていた若者は、「走りながら婦人帽や肩掛けをかなぐり捨て、ここから真っ逆さまに飛び込むんだ、どいつもこいつもね」(UT, 3)と無商旅人に教えてくれる。ただし、これは本当に死ぬための身投げではなく、飛び込んだ水音で発見され、熱い風呂に入れて蘇生してもらい、ウォピング女子救貧院に収容されることを期待しての計画的な自殺である。

虚構の世界で入水自殺が題材として

好まれた理由は、ラファエル前派の運動を起こしたミレーの『オフィーリア』(1852)に見られるように、溺死する娘には『ハムレット』のオフィーリアの美化されたイメージがあるからだ。『骨董屋』で語り手のハンフリー親方



は、「溺死は苦しい死ではなく、自殺の中で最も安楽で最善の手段である」(OCS, 1) と言っている。だが、九死に一生を得た人の話によれば、実際の溺死は言語に絶する苦しさを伴うそうである。菊池寛に「身投げ救助業」(1916)という短篇があるが、どんなに覚悟をした自殺者でも、本能的に生を慕って死を恐れるような悲鳴をあげるのだから、「もしこの時救助者が縄でも投げ込むと大抵はそれを掴む」という。人間の性^{さが}であろうか。そして、たとえ自殺が成功して川底に沈んでも、やがて膨張して浮かび上がり、土左衛門となった死体は時間とともに腐食が進み、悪臭を放ち始めるそうだから、これはとても美しい死に方とは言えない。とは言え、ショーペンハウアーが「自殺について」(1851)の中でいみじくも言ったように、「並外れて激烈な精神的苦悩に責め苛まれている人の眼には、自殺と結びつけられている肉体的苦痛などは全く物の数ではない」の

である。

ヴィクトリア朝の自殺における男女の比率は3対1ほどであったが、アイルランド独立運動を指導したパーネルの弁護士として有名なジョージ・H・ルイスは、1857年の『ウェストミンスター・レビュー』で女性の低い自殺率の原因を臆病さに帰している。当時の統計が示すように、自殺の手段として男性はピストルやナイフを使い、女性は溺死や服毒を選んでいった。入水や投身による自殺は圧倒的に女性に多いが、男性もいないわけではない。『ボズのスケッチ集』のワトキンズ・トトル氏はリージェント運河で自殺する。妻を溺愛する自信はあったものの、実際の夫婦生活が怖くて結局は結婚できずに失恋してしまう—そうした彼の生来の臆病さが、溺死を選んだ理由である。『クリスマス・ストーリーズ』の「学校生徒の物語」では、卒業生として母校の先生になった「チーズマン爺さん」が、先生の側に寝返った裏切

り者として生徒たちのイジメに遭い、ある日ふいと（実際は遺産相続のために）姿を消してしまう。生徒の間では「チーズマン爺さんはもはや堪えきれなくなり、朝早く起きて身投げをしたんだという噂が広まる」が、これは彼の性格が女性のように弱々しいからであった。消息を断った甥のウォルターの跡を追ひ、船具商の老人ソル・ギルズが姿をくますと、親友のカトル船長は老人が「ウォルターに対する心配と哀惜の念に圧倒されて自殺に追い込まれた」（*DS*, 25）という不安を抱き、テムズ河で溺死体が見つかると、せせと身元確認のために足を運ぶ。ソル爺さんは商売とは裏腹に海の男らしさに欠け、ゆったりとした物静かな老人なので、自殺するのであれば女性のようにテムズ河で、という連想がカトル船長に働いたのかも知れない。ヘッドストーンは脅迫者ライダーフッドに「生きている貴様を抱き締めている俺の腕は、あの世に行っても離れんぞ」（*OMF*, 4: 15）と絶望的な声で叫びながら一緒に溺死するが、これは自縄自縛による自殺である。だが、計画がすべて潰えて自暴自棄となり、上品な外見の下に抑圧していた激情を爆発させ、ヘッドストーンが臆病な溺死の形で自殺したのは、「理性は男性、狂気は女性」というヴィクトリア朝の定説から言えば、別に不自然なことでもないだろう。

ディケンズの作品には、入水や投身による自殺の描写と言及が多いのに対し、絞首による自殺は意外と少ない。ラルフ・ニクルビーが、喉を掻っ切っ

て自殺した男の検死陪審を務めたことを思い出し、屋根裏部屋の鉄鉤てつかぎから自分を吊り下げたのは、不運にも命綱を首に巻きつけて宙吊りになるビル・サイクス（*OT*, 50）の場合と違って、明らかに自殺である。実子のスマイクの静かな死に対し、ラルフの自殺は「狂気と憎悪と絶望」（*NN*, 62）が交錯した激情のもとでなされる。我々はラルフとビル・サイクスの違いを意識せざるを得ないが、それは守銭奴のラルフが（スクルージのように改心するまでには至らないにせよ）時おり見せる良心の呵責のせいである。同じように、ライダーフッドには感じなかった憐れみをヘッドストーンに多少なりとも抱くのは、激情をコントロールできなかった彼の人間的な—ヴィクトリア朝のコンテキストで言えば、女性的な—弱さのためではあるまいか。

『アメリカ紀行』の第6章で紹介されるブロードウェイの「墓場」という有名な監獄の中庭は、イギリスの場合のように囚人が散歩をする場所ではなく、絞首刑が行われる場所である。この監獄が建てられた頃に自殺が数件あり、それで「墓場」と呼ばれるようになったわけだが、その自殺は絞首刑に対する恐怖ゆえの自殺だったに違いない。そして、ここの独房には服をかける鉤がない。「そんな鉤があれば、彼らは自分自身を吊ってしまう」からである。一方、ロード・アイランドの精神病院では、服をかける鉤どころか、空虚な壁を除いて家具も飾りも何もない、そんな侘びしい食堂を独房として、

一人の女が監禁されている。病院関係者の話では、女が「自殺しようと決心していた」というのが監禁の理由である。しかし、そうした絶望状態に彼女を追い込んでいるのは部屋の単調さであると言って、ディケンズは病院を皮肉っている。これもまた彼のアメリカに対する失望と幻滅から生まれたアイロニーの一つである。

3 罪意識による自殺

罪意識による自殺の例としては、マードル氏とレディー・デドロックが挙げられる。最大の偽造者にして最大の泥棒だったことが判明する財界の巨頭マードル氏が、不安げに上着の袖口の下で両手を組み、「まるで自分で自分を拘束しているかのように」(LD, 1: 33) 手首を互いに握り締めるのは、彼が法律上の罪に対して抑圧している罪悪感の無意識的な行動化 (acting out) に他ならない。従って、事実そのものを暗示するディケンズ特有の、この種の直喩に親しんでいる読者は、マードル氏が最後に大理石の浴槽で阿片チンキと鼈甲柄のナイフを使って頸動脈切断という自殺をした時も、彼の執事頭と同じように

何ら驚きを覚えないはずである。

一方、レディー・デドロックには結婚前にホードン大尉との間に私生児エスターを産んで見捨ててしまったという、そして過去を秘密にして現在の夫を裏切ってきたという宗教上・道徳上の罪がある。彼女の罪は神の意志に反したことであり、その内面化した罪意識は冷たく高慢な外面によって隠されている。イスカリオテのユダはイエスを裏切って銀貨 30 枚で祭司長に売り渡したのち、その罪を後悔して銀貨を神殿に投げ込み、外に出て行って首を吊って自殺した (Matt. 27: 3-5)。最終的に家出をしたレディー・デドロックがホードン大尉の墓の入口で死んでいた原因についても、イスカリオテのユダと同じような罪悪感が関係している。彼女は手紙の中で「家を出た時はもっと悪いことをするつもりでしたのに、今までの様々な罪に、もう一つ罪を重ねずに済みました」(BH, 59) と書いているが、バケット警部が言った



ように「それは自殺のように思える」(BH, 56). ジョン・サザランドは「誰がレディー・デドロックを殺したか？」(1999)で彼女の自殺の手段をホードン大尉の死因と同じ阿片の服用だと推測した。その真偽はともかく、たとえマードル氏のように阿片を使っていないにせよ、罪悪感と後悔のために彼女の生きる意志が消滅している以上、彼女の死は「もっと悪いこと」(自殺)による死だと言わざるを得ない。

大いなる遺産を相続する見込みを得たピップは、希望に燃えてロンドンにやって来るが、用意されていた下宿は薄汚い、悪臭のするバーナード・インの一角にあった。どういうわけか、「貸間あり」のビラに睨まれるピップの目には、「ここへ新しくやって来る哀れな人間が一人もいないので、現在の住人たちが次第に自殺して砂利床の下に不浄な埋葬をされることで、バーナードの復讐心は徐々に和らげられているように」(GE, 21)見える。これはもちろんピップの無意識的な不安を投影した描写である。ここに、いずれ大いなる期待に対して失望し、マグウィッチと関係した法律上の罪意識ではなく、俗物根性から身内の者たちを見捨てた道徳上の罪意識から、ひょっとするとピップは自殺することになるかも知れないという作者の暗示を読み取ることはできまいか。無論、そうした自殺の可能性を払拭してくれたのは、汲めども尽きぬ義兄ジョー・ガージャリーの愛である。

4 絶望による自殺

自殺の原因の大半は失望が深刻化した絶望である。しかし、絶望はキリスト教の三大徳「信・望・愛」の一つに背く行為であり、神の民すべてが到達するように招きを受けている未来の幸福、すなわち「永遠の生命」を人生の土台として生きていない点で罪と見なされる。統計的に昔も今も、最初から物質的困窮の度合いが高い人たちの場合は、生き抜くことに関心が向けられるので自殺が少ない。例えば、慢性の金欠病患者ミコーバー氏が自分を殺す可能性は、「決してミコーバー氏を見捨てません」と連呼する妻を殺す可能性と同じで、限りなくゼロに近い。彼が自殺でもしておれば、ディケンズの楽天主義もチェスタトンから「卑俗な楽天主義」と言われることはなかっただろう。だが、物質的な貧しさに負けない善良な人間は最後に幸せにならなければならない—そうでなければ、ディケンズは気がすまないのである。そうした卑俗な楽天主義を体現するミコーバー氏について、チェスタトンは『チャールズ・ディケンズ論』の第10章で次のように述べている。

過去を振り返って自分の生活が失敗だったと思う、そんな人のことばかりを我々はいつも考えるが、ミコーバーは決して振り返って見たりしない。彼はいつも前を見る。明日になれば執行吏がやって来るからだ。ミコーバーのことを人生

の敗北者などと言ってはいけない。彼の馬鹿げた戦いは決して終わらないからである。彼は人生に絶望することを許されない。生きることでも多忙なのだから。

一方、最初は物質的に豊かであった人が、リストラ、失業、破産、その他の理由で、昔の自分に復帰できずに絶望的な状態に陥ると、鬱病などの精神疾患が自殺の大きな誘因となる。1998年から毎年、自殺者が3万人を超える日本は、2004年の国別自殺率の高さで10位にランクされているが、日本より上位はすべて旧ソ連や東欧の旧社会主義国であり、物質的凋落が自殺の大きな要因であることが分かる。しかし、こうした物質的凋落だけでなく、精神的凋落もまた強いストレスを伴って自殺の引き金となる。

精神的凋落による絶望からの自殺と言え、ディケンズの生涯において真っ先に思い出されるのは、『ピクウィック・クラブ』連載時におけるロバート・シーモアのピストル自殺であろう。芸術家としての自分の地位について神経過敏だったシーモアは、1830年に神経衰弱を患って情緒不安定になったことがある。チャップマン・アンド・ホール社を味方につけた10歳以上も若い駆け出しの作家ディケンズによって、この著名な挿絵画家が挿絵と文章の主従関係を簡単にひっくり返された時の胸中たるや、察するに余りあるものがある。いずれにせよ、シーモアが芸術家としての凋落によって絶望とい

う「死に至る病」から自殺したことは、想像にかたくない。

尾羽打ち枯らした芸術家という点ではシーモアと同類であるが、「陰気なジェミー」と呼ばれる落ちぶれた俳優ジェム・ハトレーは、ピクウィック氏の目には「ロチェスター橋の上で自殺を考えているように見えた」(PP, 53)。陰気なジェミーと狡猾で演技のうまいジョブ・トロッターが兄弟であったことを考えると、この場面はむしろピクウィック氏自身の純朴な騙されやすさを逆照射しているように思える。同じように、ウインクルの結婚を彼の父親に了解させるのに失敗して絶望した翌朝、雨の中をロンドンに向かうピクウィック氏の目には、「狭い離れ家の屋根の下で、うなだれて考え込んでいる陰気な顔つきの驢馬が、自殺を考えているように見えた」(PP, 51)。だが、もし善良で滑稽なピクウィック氏が楽天的なキリスト教徒でなければ、この場面は彼の隠された暗部を投影した主観的な心象風景になってしまうだろう。つまり、楽天的・牧歌的な長篇小説『ピクウィック・クラブ』に挿入された幾つかのゴシック短篇小説のように、これはピクウィック氏の楽観主義を引き立たせる役割を果たしているのである。そして、この「暗」によって「明」を引き立てる手法は、その規模の違いはあるにせよ、以後のディケンズ作品のほとんどすべてに見られる。

失敗をものともしない、狂気とも言える楽観主義の権化ミコーバー氏を擁

する『デイヴィッド・コパフィールド』以降、ディケンズの後期小説群では確かに喜劇的要素が抑制され、それに従って作風も暗くなる。しかしながら、そこでもディケンズの楽観主義と生きる意欲は脈々として波打っているように思えてならない。むしろ、喜劇的・楽天的な「地」に、深刻なテーマを暗示する陰鬱なイメージや象徴の「図」が加わったことで（もちろん、読者の見方で「地」と「図」は反転するが）、作品自体はよりバランスのとれた、より説得力のあるものとなっている。霧や疫病といった暗い象徴が支配する『荒涼館』でさえ、勧善懲悪のハッピーエンドによって悲劇も感傷も消滅する。全体に悲哀感が漂う『大いなる遺産』の主人公は、大いなる期待が大いなる失望に終わり、絶望から自殺してもよかったはずである。しかし、悲哀に満ちた結婚生活にもかかわらず、愛人と楽しい生活を送っていた（はずの）ディケンズに絶望や自殺は似合わない。ディケンズはピップを絶望させなかっただけでなく、彼とエステラとの別離を削除して作品の結末も書き直してしまった。ブルワー＝リットンに強制されて書き直したのではなく、その方がよいと思ったからそうなのだ。未完小説『エドウィン・ドルードの謎』もまた、「死」のイメージが支配的に展開する中で、それと拮抗する「生」のモチーフが潜在しており、「再び夜明け」というタイトルを持つ最終章が高らかに謳う「復活と生命」(MED, 23) を考えると、読者はエドウィンの

生存・帰還について楽観視せざるを得ない。

このようなディケンズの楽観主義によって自殺が抑止される典型例が『ニコラス・ニクルビー』の挿話にあるので、それを最後に見てみよう。朗らかな顔の御仁が語る「グロッグズウィック男爵」では、猪や熊を射止める猛者の男爵が美しい女性と結婚し、13人の子供が次々と生まれるにつれて彼女の尻に敷かれ始め、とうとう借りてきた猫のようになる。主従関係が逆転した男爵は絶望し、猟刀で喉を掻っ切つて自殺しようとするが、そこに「絶望と自殺の精霊」が現れる。しかし、その精霊と話しているうちに、天の邪鬼の男爵は自殺の馬鹿らしさに気づき、精霊を追い払ってしまう。心理的リアリズムでは、この精霊は男爵が意識下に抑圧していた悪の分身を主観的に、つまり独自の想像力を通して体験したものであるということになる。その悪の分身を男爵が再び意識下に回収して自殺しなかったということは、彼が想像力を媒体として自分で自分を救ったと解釈できるだろう。この挿話には、人生に苦痛や苦悩の事実があるのを認めながら、なおも楽しみや喜びが存在することを信じて疑わないキリスト教的楽観主義の作家、ディケンズの面目躍如たるものがある。その証拠に、ディケンズは朗らかな顔の御仁を通して次のように語っている。

私はすべての人に助言したい。いつか似たような理由で（非常に

多くの人にあることですが) 気分がふさいだり憂鬱になったりした時は、どうか問題を両面から、できれば良い方の面に拡大鏡を当てて、見るようにしていただきたい。それでもなお、無断で世を去りたいような気持ちになった時は、とりあえず大きなパイプをくゆらし、酒を一瓶すべて飲み干し、あっぱれなグロッグズウィッグ男爵の話を教訓にしていきたいと思います。(NN, 6)

「ベーコンの断面に赤と白の層の縞模様があるように、悲劇と喜劇が規則正しく順番に提示される」(OT, 17) のが、人生劇場の舞台である。禍福は糾^{あざな}える縄のごとし。しかし、ディケンズの基本的なスタンスは、「この世には暗い

影があるものの、それに比べると光の方が強いのだ」(PP, 57) と述べた『ピクウィック・クラブ』から、「悪事はしばしば自らに対して立ち止まり、悪事をなす者とともに死に絶えるが、善事はさにあらず」(OMF, 1: 9) と語った『互いの友』まで、光と善の思想がその象徴的表現において中心的座標をなす聖書に則した樂觀主義である。いやしくもディケンズを信奉する以上、我々は不景気という大波に揺れる「大学丸」で三等航海士へ降格になっても、決して絶望してはいけない。そんな時は、グロッグズウィッグ男爵を師表と仰ぎ、昔の船員が楽しんだ水割りラム酒 (grog) をがぶ飲み (swig) し、物事の楽しい面を見るように努めなければならないのである。

